

# 隅田公園の歴史的変遷

## ～臨水公園の設計思想と空間の変化～

1G00J066-1 服部 洋佑\*

Yohsuke HATTORI

関東大震災の後に、震災復興三大公園と 52 の小公園が誕生した。「隅田公園」は臨水特性を活かした公園道路や遊歩道の設計が行われた。しかし、広大な空間ストックは他のインフラの設置により犠牲となり、防災上から建設に至った外郭堤防、利便上開通した首都高速道路 6 号線によって、開園時の設計思想は失われてしまった。そこで「臨水性」から「親水性」へと言葉を変えて、魅力を復活させる運動が活発となる。本研究では年表・図面の作成を通して公園内の施設・植栽・園路の歴史的変遷を視覚的に捉え、時代ごとの設計思想の変遷と整備成果を明確にする。

**Key Words** : 隅田公園、歴史的変遷、設計思想、場所性

### 1. 研究の背景と目的

公園は都市環境の中で、人々が休息、散歩、観賞、運動などを楽しめるような「利用効果」と、災害時における避難所・延焼防止帯としての「存在効果」がある。また、都市住民のレクリエーション空間の確保、美しい都市景観の形成等の多様な機能を有している<sup>1)</sup>。

公園の必要性に関する議論においては 1923 年の関東大震災が大きな転機となった。後藤新平を中心とした帝都復興計画の中で、折下吉延により震災復興三大公園が設計される。「隅田公園」もその 1 つであり、震災の影響を反省し“非常時の群集の避難地”や“延焼防止帯”をつくることは言うまでもなく、“名所古蹟の保存”や“運動施設や遊技場を出来るだけ公園敷地内につくる”ことも考えられた。また、隅田川沿いの“臨水公園”に相応しい公園道路（プールパール）・遊歩道（プロムナード）などの設計がなされる。公園内に野球場・陸上競技場・プールなどのスポーツ施設を組み込むことは、当時としては近代的な公園設計として注目を浴びることになる。

しかし、公園は社会状況や人々・時代のニーズにより影響を受けやすい柔軟な空間ストックである。つまり、他の都市施設を収容できる広大な空間ストックを持つ。現在の隅田公園には数多くの施設が立ち並び、複雑な園路を有している。公園と河川との間には通称カミソリ堤防が立ちはだかり、首都高速道路 6 号線は公園敷地内を縦断する形で開通した。このように隅田公園は開園当時の魅力を失ってしまった。

そこで本論文では、臨水「隅田公園」がどのような歴史的変遷を経て現在に至っているのかを以下の 2 点

から明確にする。

- (1) 施設・植栽・園路の歴史的変遷を図面や年表を作成して視覚的に捉える
- (2) 設計思想の変遷と公園整備成果

設計思想の変遷を時系列で示すことで、どの時期に思想が潰えてしまったのか、あるいは活かされてきたのかを明確にする。また、設計思想が公園整備に与えている影響をまとめ、公園という社会資本のあり方や整備改修の方向性を示すことも目的とする。

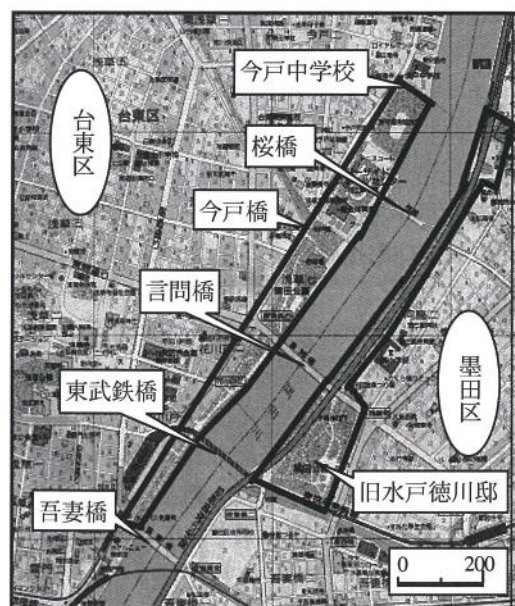


図 1 隅田公園の周辺地図

### 2. 研究の概要

- 2.1 既存研究、ならびに本研究の位置付け  
震災復興期に至る公園の設計論や歴史的系譜について

\* 早稲田大学理工学部社会環境工学科景観・デザイン研究室 4 年

ては、小野良平「震災復興期に至る公園設計の史的  
研究」<sup>2)</sup>により整理分類されている。また石川幹子「ニュー  
ヨークにおけるセントラル・パークの19世紀末以降の  
変遷と再生に関する研究」<sup>3)</sup>では、海外の1つの公園に  
ついての歴史の変遷を研究している。しかし、日本の  
1つの公園に限定して開園時から現在に至るまでの歴  
史的変遷を扱った研究は見られない。

そこで、本研究では、

- ・ 震災復興大公園として誕生以来、長期にわたって  
利用され続けていること
- ・ 土地固有の特性（臨水）を活かして設計されてい  
ること

という特色を有した隅田公園を対象として、公園の設  
計思想、施設、植栽、園路を調査し、その歴史の変遷  
を明確にする。

## 2. 2 研究の概要と流れ

研究の概要は以下の通りである。

### (1) 調査

隅田公園<sup>4)</sup>、帝都復興事業誌<sup>5)</sup>、都市公園<sup>6)</sup>、東京都  
市計画物語<sup>7)</sup>などの文献から、隅田公園・隅田川・周  
辺社会状況などの項目を調査する。また、文献調査時  
の疑問点を、管理者である台東・墨田両区役所にヒア  
リングし、現地調査も行う。

### (2) 年表化

調査によって明確となった施設・植栽・園路・周辺  
社会状況の出来事を、台東区と墨田区のゾーンごとに  
分類して整理する。

### (3) 空間の把握

現在の正確な寸法が把握できる2500分の1の地形図  
に縮尺を合わせ、隅田公園開園前から現在に至るまで  
の施設配置や植栽・園路形態を、年表や文献、住宅地  
図<sup>8)</sup>、航空住宅地図<sup>9)</sup>、写真カタログ<sup>10)</sup>などから推測  
して作成する。

### (4) 設計思想の変遷と公園の整備成果

年表や図面から、設計思想が隅田公園史のどの出来  
事で獲得され、どの時期に潰れてしまったのかを時系  
列で示す。また、公園整備の設計意図や整備目標によ  
り出来上がった施設・植栽・園路により得られた成果  
についてまとめ、公園の果たしてきた役割を明らかに  
する。

## 3. 隅田公園の歴史の変遷

### 3. 1 開園時の設計思想

1923年の帝都復興院理事会で決定された政府原案  
の中の「公園設置理由書」では、次のように述べられて

いる。

「隅田川上流兩岸にして大体吾妻橋附近より白鬚橋  
附近に至る沿岸に道路公園を設定せむとす。是れ平時  
に在りては四時行楽の地となり一朝非常に際しては群  
集の避難場たらしめんとす。殊に此の地は古来史蹟に  
富めるが故に此等旧蹟を保存すると同時に、東京随一  
の臨川公園たらしむを得へし」<sup>11)</sup>

しかし、帝都復興計画が圧縮されたことにより、上  
記の長さは達成されずに大幅に短くなった。そこで、  
旧徳川邸の買収、施設移転、台東・墨田区両岸埋め立  
てなど、6度にわたる公園区域の変更が行なわれた。

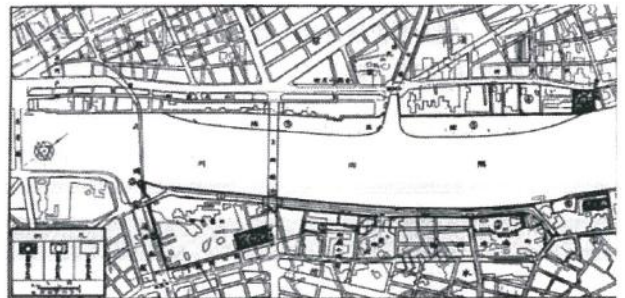


図2 隅田公園区域変更経過図<sup>12)</sup>

この6度の公園区域の変更により

- (1)震災復興公園の誇り
- (2)浅草区（台東区）と本所区（墨田区）の面積均衡
- (3)臨水公園に相応しい水辺の厚み
- (4)スポーツ施設を設置しうる十分な面積確保
- (5)公園の連続性の確保

を目指していたことが推測される。また、特別都市計  
画委員会の総会で直木倫太郎復興局長官は、

「従来の公園風の公園を造ることは避けまして、新し  
く造る公園の設計は出来るだけ運動場、遊戯場等の方  
面に使はれるように設計したいと思うのであります。  
唯隅田公園は幅が狭くて用地が取れませぬが、併し昔  
から名所戸蹟に富んで居ります。（中略）水の見渡せる  
気持ちの裕かになる公園を設けて置くことも必要と考  
えまして、此公園を設けることに決定したのであります。  
（下略）」<sup>13)</sup>

と公園位置、選定理由、目的を明確にしている。

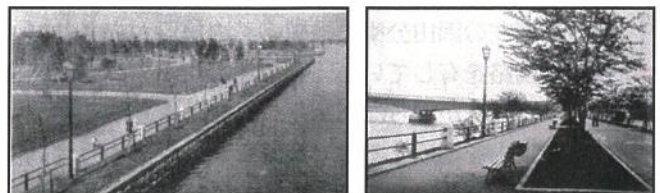


図3 開園時のプロムナード<sup>14)</sup>

3. 2 隅田公園の歴史と空間の変遷

表 1 周辺社会状況と隅田公園の歴史年表

	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	
社会状況		■地下防空壕を設置 (43) ・蟻の町の出現 (45) ・公園緑地課が非常廃体処理事務を行う (44) ・戦争のため 早慶レガッタ中止 (44~46)	■隅田公園開園 (31)	■蟻の町完全撤去 (60) ・水質悪化、レガッタ中止 (61) ・早慶レガッタ復活 (78) ・花火大会が防災上中止 (61) ・花火大会復活 (78) ・全体的な園内整備、復旧5ヵ年計画 (58) □都市公園法が施行 (56) □東京都計画公園緑地の大改訂 (57) ・外郭堤防建設促進大会 (55) ■隅田川外郭堤防建設開始 (57) □東京都制が施される (43)	□隅田公園基本構想 (73) ・首都高速道路6号線向島ランプの開通 (82) ■首都高速道路6号線が公園を縦断 (71) ・早慶レガッタ復活 (78) ・花火大会復活 (78) ・隅田公園は都から台東・墨田両区へ移管 (75) ・隅田川マラソン、駅伝大会開催 (79) ・墨田区政30周年記念事業 (77) ・墨田区と台東区が23区初の姉妹区の締結 (77)	○隅田公園基本構想 (73) ・首都高速道路6号線向島ランプの開通 (82) ■首都高速道路6号線が公園を縦断 (71) ・早慶レガッタ復活 (78) ・花火大会復活 (78) ・隅田公園は都から台東・墨田両区へ移管 (75) ・隅田川マラソン、駅伝大会開催 (79) ・墨田区政30周年記念事業 (77) ・墨田区と台東区が23区初の姉妹区の締結 (77)	○隅田公園基本構想 (73) ・首都高速道路6号線向島ランプの開通 (82) ■首都高速道路6号線が公園を縦断 (71) ・早慶レガッタ復活 (78) ・花火大会復活 (78) ・隅田公園は都から台東・墨田両区へ移管 (75) ・隅田川マラソン、駅伝大会開催 (79) ・墨田区政30周年記念事業 (77) ・墨田区と台東区が23区初の姉妹区の締結 (77)	○隅田公園基本構想 (73) ・首都高速道路6号線向島ランプの開通 (82) ■首都高速道路6号線が公園を縦断 (71) ・早慶レガッタ復活 (78) ・花火大会復活 (78) ・隅田公園は都から台東・墨田両区へ移管 (75) ・隅田川マラソン、駅伝大会開催 (79) ・墨田区政30周年記念事業 (77) ・墨田区と台東区が23区初の姉妹区の締結 (77)	○隅田公園基本構想 (73) ・首都高速道路6号線向島ランプの開通 (82) ■首都高速道路6号線が公園を縦断 (71) ・早慶レガッタ復活 (78) ・花火大会復活 (78) ・隅田公園は都から台東・墨田両区へ移管 (75) ・隅田川マラソン、駅伝大会開催 (79) ・墨田区政30周年記念事業 (77) ・墨田区と台東区が23区初の姉妹区の締結 (77)
台東区側	○児童遊園 (31) ○競技場 ○大プール (31) ○少年用プール (32) ○児童公園移設 (38)	○児童公園の位置に野球場設置 (38) ○競技場と大プール間にテニスコート4面 (35) ○台東体育館の設置 (57)	○テニスコートと野球場移設 (57)	○テニスコートと野球場移設 (57)	○テニスコートと野球場移設 (57)	○テニスコートと野球場移設 (57)	○テニスコートと野球場移設 (57)	○テニスコートと野球場移設 (57)	○テニスコートと野球場移設 (57)
B	◆言問橋北の橋え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38)	◆言問橋北の橋え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38)	◆言問橋北の橋え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38)	◆言問橋北の橋え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38)	◆言問橋北の橋え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38)	◆言問橋北の橋え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38)	◆言問橋北の橋え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38)	◆言問橋北の橋え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38)	◆言問橋北の橋え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38)
C									
D									
墨田区側	○幼年・少年・青年用児童遊園 (31) ○帝大艇庫 (31) ○テニスコート2面 (31)	○少年野球場設置 (49)	○少年野球場設置 (49)	○少年野球場設置 (49)	○少年野球場設置 (49)	○少年野球場設置 (49)	○少年野球場設置 (49)	○少年野球場設置 (49)	○少年野球場設置 (49)

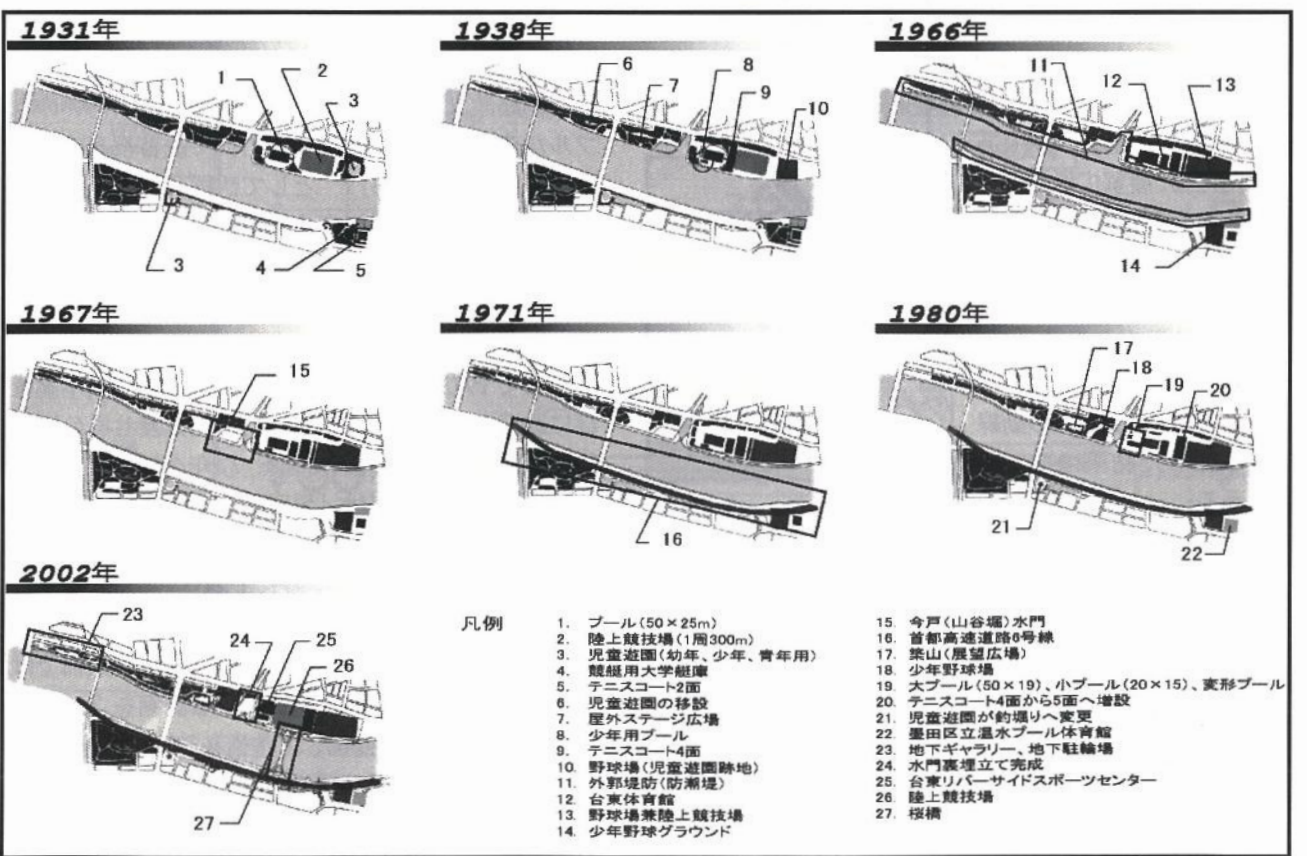


図 4 隅田公園の空間変遷

## 4. 設計思想の変遷と整備成果

隅田公園の施設・植栽・園路整備の変遷や周辺社会状況が、一体どの時期にどのような部分が行われたのかを表1に示す。その際、台東区側はAからDの4ゾーンに区分し、墨田区側は1つのゾーンとする(図5)。

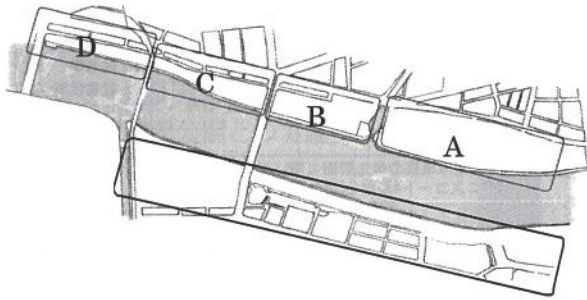


図5 隅田公園のゾーン区分

表1から分かることは、園内の整備改修(◆印)時期が1960年前後と1980年前後に集中していることである。

1960年前後の整備改修は、高度経済成長期の過剰な地下水の汲み上げや、台風による洪水・高潮といった自然災害の防災対策として建設された外郭堤防により盛土整地を余儀なくされたのである。また、臨水公園としての価値が失われ、河川と独立した園路植栽へと推移していく。

1980年前後整備改修は、1975年に「隅田公園が区へ移管」されたことや1977年の「台東・墨田区の姉妹区締結」がきっかけとなっていることが読み取れる。開園当時の設計思想の復活を目指して、両区が連携して整備を行う。台東区側では、外郭堤防により河川を見渡せる位置は堤防上のみであったため、展望広場の設置を行った。しかし、図6、7のように現在では展望広場付近には階段やスロープが複数存在している。複雑な園路が出来上がったのは、展望広場への動線を考慮した結果であるといえる。



図6 展望広場への動線<sup>15)</sup>



図7 展望広場への動線と展望広場から見た河川

表1や図4で、隅田公園の歴史的変遷や空間の変遷を示した。ここではこれらの図表から読み取れることをもとに、隅田公園開園時から現在に至るまでの設計思想の変遷、設計意図・目標、達成された整備(施設、植栽、園路)、獲得された成果を整理し考察する(図8)。

隅田公園開園時の設計では、震災復興公園として、つまり防火機能としてのオープンスペースが求められ、河川沿いという場所性を活かした道路公園(プールバール)や水辺の遊歩道(プロムナード)を有して誕生した。また、野球場・陸上競技場・プール施設といったスポーツ施設が公園内に組み込まれたことは画期的であり、人々を惹きつけた。

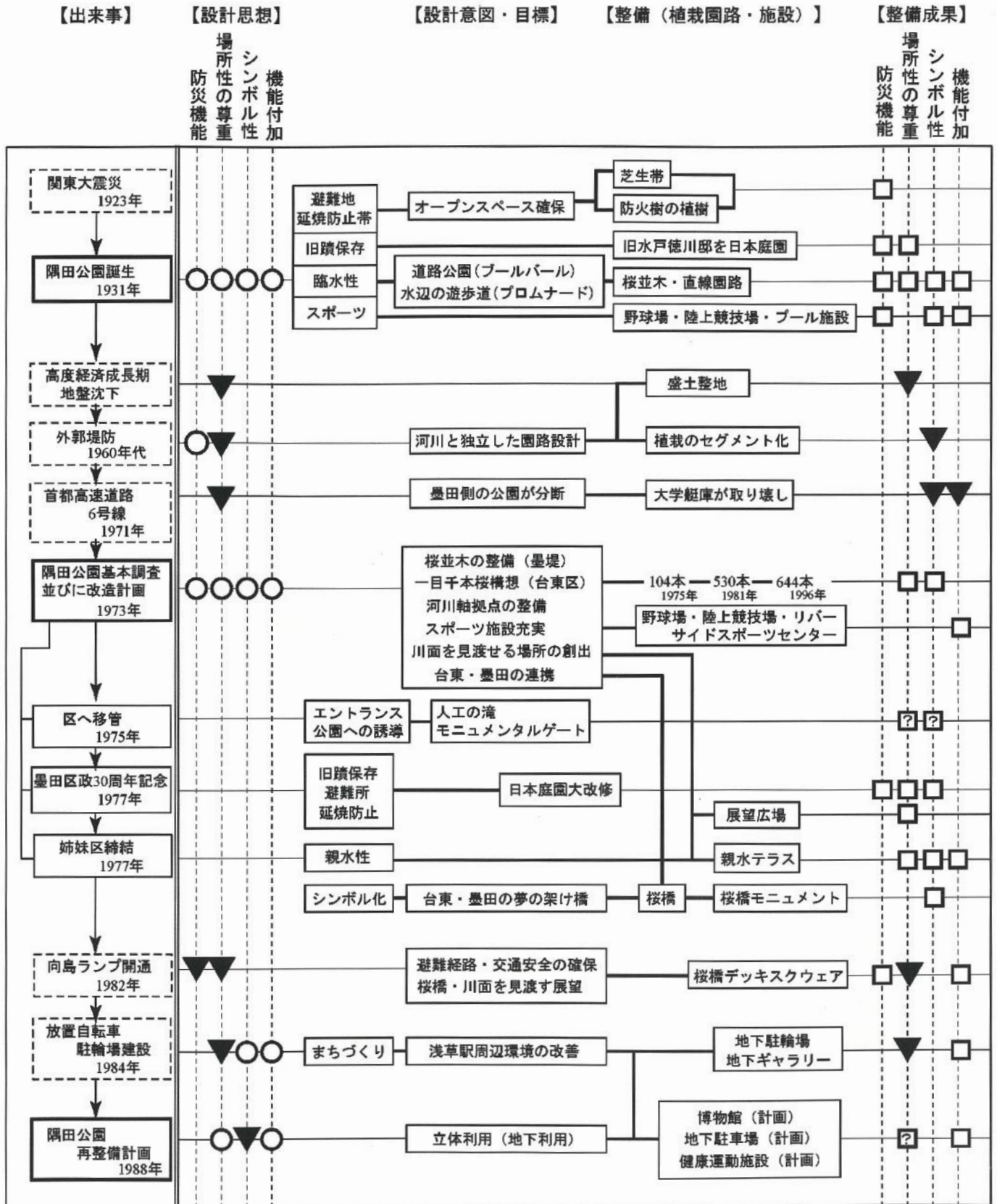
そこで、開園当時の設計思想として以下の4つを挙げるができる。

- ・ 防災機能
- ・ 場所性の尊重(立地特性)
- ・ シンボル性
- ・ 機能付加

これら全てが満たされた上で、1931年に隅田公園は開園に至ったのである。

しかし、外郭堤防の建設、首都高速道路6号線などの外的要因により、防災機能や利便性を獲得することが出来た反面、機能を追及し場所性を考慮していなかったために、隅田公園の一番の魅力である「臨水という場所性」が失われてしまった。さらに、河川と独立した園路設計が行われるようになり、河川沿いのシンプルな直線園路は複雑化されていく。首都高の開通では「水上運動の中心」<sup>16)</sup>として活躍してきたボートの置き場であった大学艇庫や墨堤の桜並木といった「シンボル」が奪われてしまった。この時期は「隅田公園の受難」と呼ばれ、開園当初の設計思想は失われてしまった。

そこで1973年に、東京都による隅田公園基本調査並びに改造計画がつくられる。河川を見渡せる公園の復活を目指し、75年の区へ移管、77年の姉妹区締結をきっかけとして、両区は「場所性」を取り戻そうと「親水性」をキーワードに協力し合う。桜橋や親水テラスは73年の改造計画を原案としており、親水設計としては極めて先駆的であったと言える。なぜならば、隅田公園親水テラスの成果を確認した上で、東京都では隅田護岸全体を「傾斜型護岸」にする計画を立てていたからである。両区で連携して整備を行ったことにより、開園当時の4つの設計思想を取り戻す整備成果を挙げる事ができたと思う。



- 凡例 ○ : 求められた設計思想    □ : 公園整備計画・事業  
 ▼ : 失われた設計思想・特質    ◌ : 公園整備に影響を与えた外的要因  
 □ : 整備により獲得

図 8 設計思想の変遷と整備成果

1982年に開通した向島ランプにより、交通量を増大させてしまったことや、場所性を奪ってしまったという負の要素がある

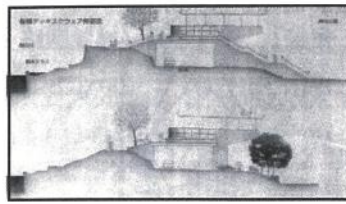


図9 桜橋デッキスクウェア断面図<sup>17)</sup>

ことは否定できない。しかし、この向島ランプをきっかけとして「臨水公園としての場所性」を考慮に入れた桜橋デッキスクウェアが作られた。交通安全対策としての機能を果たすと同時に、「首都高や都道により分断された墨田区側の公園の一体化」や「桜橋・隅田川を見渡す展望台」としての役割も期待されている。つまり、ランプの開通は場所性を奪ってしまったものの、桜橋デッキスクウェアの親水という場所性を考慮に入れた設計によって、多少ではあるが魅力の喪失を和らげることが出来たのではないかと思う。

また、浅草駅周辺の放置自転車対策への要望が区民から挙げられると、隅田公園内の地下に駐輪場が建設される。臨水公園の「場所性」を考慮せずに「機能付加」に重点を置き、立体利用として公園地下に施設が組み込まれることは、公園が単に都市施設の受け皿として用いられているように思える(表2)。

表2 隅田公園再整備計画による立体利用<sup>18)</sup>

ゾーン	対象エリア	テーマ	地上部	地下部
A~B	桜橋～ 言問橋	イベント・スポーツレ クリエーション	公園管理事務所 多目的グラウンド 水上ステージなど	地下駐車場 健康運動施設
C	言問橋～ 東武鉄橋	歴史散策	博物館 遊戯コーナー お花見広場、桜並木	—
D	東武鉄橋～ 吾妻橋	エントランス (浅草の玄関口)	エントランス広場 水上バス乗場 レストラン、休憩所	駐輪場

## 5. 結論

### 5.1 得られた知見

隅田公園の歴史的変遷は、年表(表1)、図面(図4)を作成することで明らかにした。また、それらから開園時の設計思想の変遷と、思想を追い求めた整備成果についての図を作成することができた(図8)。図表を通して分かったことは、隅田公園は開園当初において明確な設計思想をもって誕生しており、外的要因により施設・植栽・園路が変化していることである。また、失われてしまった設計思想を復活させるために整備目標を掲げ、実際に獲得するために整備を行っていることが分かった。つまり、時代が進もうと開園当時の4つの設計思想を復活させるために目標が立てられて、

整備改修が行われていくのである。また、設計思想の変遷と得られた整備成果の関係から、以下の知見を得ることができる。

- 公園整備計画による整備であっても、1つの設計思想を追い求めて整備改修を行うと、その整備の結果が他の設計思想にとってマイナス要因となる可能性がある。反対に、外的要因による整備であっても、場所性を考慮することでマイナスを和らげることは可能である。
- 土地固有の場所性が公園の魅力に与える影響は大きい。すなわち、場所性を尊重せず機能付加に特化した整備では魅力を失う可能性がある。

### 5.2 今後の課題

本研究では、隅田公園の歴史的変遷を施設、植栽、園路、設計思想、公園整備、整備成果という観点から分析し、設計思想によって導かれる整備成果をまとめることができた。しかし、隅田公園のインフラとしての意義や整備成果の評価をするためには、公園を取り巻く周辺環境(イベント、交通網、利用する人々の意見等)まで調査の枠を広げなければならないと思う。

### 参考文献

- (社)日本都市計画学会編：都市計画マニュアル(都市施設、公園緑地編)、丸善株式会社、pp21、2002
- 小野良平著：震災復興期に至る公園設計の史的的研究について、造園雑誌53(5)、pp73、1990
- 石川幹子著：ニューヨークにおけるセントラル・パークの19世紀末以降の変遷と再生に関する研究、土木史研究No.11、pp37-48
- 川本昭雄著：隅田公園(東京公園文庫40)、東京都公園協会監修、郷学社、1981、第一版、
- 帝都復興事業誌「公園編」
- 都市公園(Public Parks magazine)、東京都公園協会、1983、1996、1997
- 越沢明著：東京都市計画物語、筑摩書房、pp39-52
- 日本住宅地図出版株式会社編：ゼンリン住宅地図、台東区、墨田区、1978-2002
- 東京都航空住宅地図、1974、1985
- 隅田の今昔(写真カタログ)、墨田区緑図書館編
- 前掲書5)、pp14
- 前掲書5)、pp47
- 前掲書4)、pp21-22
- 前掲書7)、pp39、45
- 前掲書8)、2002
- 前掲書5)、pp90
- 前掲書6)、pp37、1997
- 前掲書6)、pp37-38、1996